出生前検査のご案内

---

1. はじめに：出生前検査について

出生前検査とは、赤ちゃんが生まれる前に、胎児の健康状態や染色体・遺伝子に関する情報を得るための検査です。

誰もが健康な赤ちゃんの誕生を願う気持ちを持っていますが、どのような検査を行ってもそれを 100%保証することはできません。また、出生前検査は全ての方にとって必要なものではなく、「検査を受けない」という選択も尊重されるべき大切な自己決定です。

当院では、検査の種類や意義、限界についてご理解いただいた上で、ご本人の意思に基づいた選択ができるよう、遺伝カウンセリングに力を入れています。

---

2. 日本医学会の認証制度について

当院は、日本医学会「出生前検査認証制度」に基づく**認証施設・基幹施設**です。制度に則り、適切な検査体制と情報提供体制を整え、十分な遺伝カウンセリングのもとで検査を提供しています。

出生前検査に関する詳細は、以下の公式サイトもご覧ください：-

日本医学会 出生前検査認証制度等運営委員会

– 認証施設一覧

- 出生前検査の情報提供サイト（患者さん向け）

---

3. 当院で行っている出生前検査

以下の検査を実施しています。いずれの検査も、妊娠週数や状況に応じて適応を判断し、遺伝カウンセリングを通じてご本人・パートナーの希望と同意のもとに行われます。

■ *妊娠初期・中期・後期 超音波検査*

初期は染色体疾患のリスク評価、中期、後期は胎児の形態や発育状態を評価する検査です。妊娠週数に応じて適切なタイミングで行います。

■ *コンバインド検査（NT 計測＋母体血清マーカー）*

妊娠 11〜13 週に行う非確定的検査で、染色体異常のリスクを評価します。

■ *NIPT（非侵襲的出生前遺伝学的検査）*

母体血液中の胎児 DNA を解析し、21・18・13 トリソミーの可能性を高精度で推定する非確定的検査です。

■ *羊水検査*

腹部に針を刺して羊水を採取し、胎児の染色体や遺伝子の変化を直接調べる確定的検査です。

■ *絨毛検査*

腹部に針を刺して絨毛を採取、もしくは子宮頸管を通してカテーテルを挿入して絨毛を採取し、胎児の染色体や遺伝子の変化を直接調べる確定的検査です。

■ *遺伝性疾患に関する遺伝子検査*

ご家族に遺伝性疾患があり、遺伝カウンセリングの結果、希望があり、検査が可能な場合場合に、胎児の遺伝子を調べる検査を行っています。

---

4. 遺伝カウンセリングについて

当院では、出生前検査を希望される方に対して、遺伝カウンセリングを実施しています。

■ *担当者*

- 周産期専門医
- 認定遺伝カウンセラー

■ *内容*

- 検査の種類・意義・限界についての情報提供
- 結果の意味と、次に取るべき行動の説明
- 家族の病歴や希望に応じた検査選択の相談
- 出生後の育児や支援体制に関する情報提供
- 障がいを持つ方々の存在を否定することなく、すべての人が共に生きる社会をめざす姿勢を持って取り組んでいます。

■ *予約について*

- かかりつけ医療機関からの紹介、または個人でのお問い合わせも可能です。
- 平日 9:00〜15:00 の間に対応しています。

---

5. 受診の流れ・予約方法

■ *予約方法*

- NIPT：かかりつけ医より **FAX で予約取得**
- その他の検査：かかりつけ医より**電話で予約取得**または個人でお問い合わせ

問い合わせ：宮城県立こども病院産科外来　022-391-5111(代表)

■ *受診条件*

- 紹介状の持参が必要です。

- **夫婦もしくはカップルでの受診が必須**です。
- 小さなお子さま連れでの受診はご遠慮ください。

■ *ご注意*

- 適切な遺伝カウンセリングの時間を確保できるよう、**当院より指定した日時**での受診をお願いしています。

6. 出生前検査のメリットとデメリット

出生前検査には、妊娠中の大切な判断に役立つ情報を得るというメリットがある一方で、検査の限界や注意点（デメリット）についても、あらかじめ正しく理解しておくことが大切です。

◆ メリット

■ 胎児の状態を早期に把握できます。

■ 染色体の変化や特定の病気のリスクを、妊娠初期から知ることができます。

■ 心の準備や選択肢の検討が可能になります。

■ 必要に応じて出産後の医療体制や生活環境の準備を早めに進めることができます。

■ 情報に基づいた意思決定ができます。

■ 妊婦さんやご家族が、自分たちの価値観に沿った選択をする際の判断材料になります。

◆ デメリット・限界

■ すべての病気がわかるわけではありません。

検査には限界があり、陰性であっても見逃される疾患があります。すべての異常を調べることはできません。

■ 非確定的検査では陽性となっても、実際には異常がない場合があります。確定診断には羊水検査などが必要です。

■ 検査結果による不安や葛藤が生じることがあります。

- 陽性の結果はもちろんのこと、陰性であっても「検査を受けたことへの迷い」や、「もし異常があったらどうしていたか」といった自責の念を抱く方もいらっしゃいます。検査を受けること自体が心の負担になることもあります。
- 多くの検査は保険適用外となり、自費でのご負担が必要になります。